



他人の代表
<http://www.tanin.jp/>





他人の代表

目 次

萩久保くんと騒がしい子猫	5
萩久保くんと上品な猫	4 0
萩久保くんと世界一奔放な猫	5 6
萩久保くんと纏わぬ猫たち	7 8
萩久保くんと血統書付きの猫たち	1 0 0
あとがき	1 1 5



イラスト えいな

第一章 荻久保くんと騒がしい子猫

「ちよつとそのあなた！」

いきなりの大声に、俺だけでなく、ざわめいていた周囲も一瞬しんとする。

新入学生として、勧誘のぬるま湯に浸かっていた俺の適当姿勢をひっぱたくかのような厳しく大きな声。

周囲の勧誘の人たちも、一瞬静まるくらいの声だ。

女の人の声で、大きい声とは裏腹に少しだけ舌足らずなのが特徴的だった。

さて、これはどこの勧誘だろう。

「はい？」

俺はゆっくりと振り向くと、一人の女の子が俺を見上げていた。

平均的の女子よりも大分背が低いその子は、高校生になったらそろそろ似合わなくなるし卒業だろう、と言ってもいいツインテールがまだまだ似合っている。

そして、大きくて生意気そうな目もまた、それに合っていた。

背格好もそうだけれど、どう見ても先輩じゃない。

真新しい制服に、入学式の前につけてもらった花のバッヂをしたままで、更にピンクの小さな手提げからは、入学のしおりがのぞく。

「えっと、何？」

新入生だし少なくとも、部活の勧誘じゃないだろう。

まあ、背丈は小さいが可愛い子だし、話しかけられて少し嬉しいと思ったのも事実だ。

だけど、その、睨んでいるような表情に友好さをあまり感じなかった。

「あなた——」

女の子が俺を指差して、口を開く。

「私のお世話をしなさい！」

そして、とてつもない事を言い出した。

人間は、自分の予想と大幅にかけ離れた言葉を言われると、しばらく何も出来ないって本当だな。

俺はしばらく何も出来ずに固まっていた。

「さあ、早く！」

さあ、早くと言われても、そもそも何をすればいいか分からないし、する気もない。

その後は、これをどう対処しようかだけ迷って、また動けなかった。

「――断る」

俺は、浮かんだ答えの中から一番簡単なものを選び、答える。

そう言つてさつさとその場を去ろうとする。

「待ちなさいよ！ 世話をしなさいつて言つてるのよ！」

歩き出した俺の腕をつかむ彼女。

「ああ、さつき聞いた。だから嫌だつて言つただろ？」

「私を誰だと思つてんのよ！」

女の子は尊大な態度で腕を組む。

あー。面倒なのにつかまつたな。

「……誰のつもりなんだよ？」

「聞いて驚きなさいよ！ 私は江明希来。えめきらあの江

明家の長女よっ！」

ない胸を張つてそう宣言をされる。

その姿勢があまりにも堂に入っているの、ほう、あの江明家……と思つてみたけど、そんな家は知らなかった。

「希来て可愛い名前だな、じゃ、そういうことで俺はさつさと去ろうと、さつきよりも早く逃げ出した。」

「だーかーらー。待ちなさいよ！」

しかし、まわりこまれた。

「わーたーしーのーせーわー……っ！」

あー面倒くさい！

新入生在校生が集う場所で、腕にしがみつかれながらそんな事を大声で言われた経験はあるだろうか。

ない人はとても幸せだと思う。

「わかつた！ 話くらい聞くから！ ちよつと場所を変えよう？ な？」

俺はとりあえず、この場から去ることを第一優先にした。

「うん、じゃあ私を連れて行きなさい！ あ、パフェが食べたい！」

「はいはい分かつた分かつた」

なんだか、既に世話をしているような気がするの、は気のせいだろうか。



俺の名前は、荻久保篤。

ごく普通の中学生、いや、今日からは高校生だ。

中学の成績は悪くなかった。

だからこそ、この辺りの公立でも頭のいい、こ

の高校に入学する事が出来たわけだ。

中学時代には部活が必須だったので、何となく

バスケをしていた。

だが、高校になってそれを続けるつもりは特にない。

中学時代も本気でやってる奴には敵わなかった

し、そういう奴らは高校でもバスケを続けるんだ

ろうけど、俺はまあ、そこまでの情熱をバスケに

持つてない。

そういう青春もありだと思っけれど、俺として

はもう少しゆるくて楽しい青春を送りたいな、な

んで思ってるところでもある。

そんなわけで高校ではゆるい部活に入るか、帰

宅部で友達と暇つぶしに遊びに行くような生活を

しようかと思ってる。

ま、バスケ部の方も、特に中学時代に活躍もな

い俺なんかに興味を持つわけもないだろうしな。

とにかく、何となくクラブに入って楽しみたいな、

などとは思うが、特に入りたいクラブもない俺の

ような奴には、今の時間はとても重要だ。

朝にあった入学式も無事終わり、クラスでの簡

単な説明も終わり、後は帰るだけの放課後。

だけど校庭には、今日は休みのはずの在校生に

溢れている。

いわゆる部活の先輩達だ。

俺達を自分の部活に入れようと勧誘のために待

ち構えている。

そして、それは俺としても望むところで、これ

からは俺に合う部活があるかどうかを探す、貴重

な時間でもある。

目の前には、本来広いと思われる昇降口から校

門へと向かう並木道。

咲きかけの桜が、数日後を期待させる。

本来はのどかな道だと思っけれど、今は違う。

大声を上げて勧誘をする人。

管弦楽器の音。

実演をする人たち。

チラシを配る人たち。

そんな数多くの人が俺の前に待ち構える。

「君、身長高いな、バスケットなんてどうだ？」

いきなり声をかけてきたのは、バスケットだった。そこだけはやめようと思っているところに話しかけられると、何となく運命を感じてしまう。

俺の事を長身だと言ったその先輩は俺よりも更に長身で、いかにもバスケットをやっているという感じの筋肉をつけている。

「あ、はい、考えておきます」

俺はチラシを受け取って適当に流す。

いや、バスケットが嫌いなわけじゃない、むしろスポーツの中では好きな方だ。

けれど、毎日ふらふらになるまで努力しても、結局は得られるものが少なすぎるんだよな、体育会系って。

いや、分かってるさ、何かを得るためにやってくるわけじゃなくて、そういう努力そのものが将来の貴重な財産になるっていうのは、まあ、知識として。

でも、それがなくても世の中でうまくやってる人は山ほどいるし、それを選択する人を馬鹿にすることはないけど、俺はその他の道で頑張りたいと思うというだけの話だ。

「ねえ、その君、コーラスに興味ありませんか？」

次は女の人に声をかけられる。

「コーラスはよく知りませんね」

「そうですね。また興味が湧いたら来て下さいね？」

そう言っ、チラシを渡される。

コーラス部かあ。

自分がそれをしている事があまり想像つかないな。

やっぱり腹筋とかして声を鍛えるんだろうか？

うーん、まあ、俺には合わないか。

「む、君はサッカー出来そうな体格だな」

「その子！ 水泳部なんてどう？」

「男の人こそ、調理部ですよ？」

たった十メートル歩いただけで数多くの部活に勧誘される。

さすがにその連続は疲れてきた。

いちいちクラブずつ考える暇がなかったので、チラシだけ貰って後で考えることにしよう。

そんな時、俺は、変な女の子に出会った。

□

俺は女の子、えーっと、希来って言ってたっけ？
その子と手をつないで学校を出た。

いや、俺はナンパ師でもなければ、寂しがり屋でもない。

さつき会ったばかりの女の子と手をつないで歩くほど、調子のいい奴じゃない。

免疫が全くないってわけじゃないけど、どちらかというと、女の子には弱い方だ。

ただ、この子が離れたら逃げるでしょ、と言って離してくれないだけだ。

こんな光景を見たら、千人中九百九十九人が仲のいいカップルが歩いていると思うことだろう。

後の一人は、離れたら逃げるから手をつないでいるんだな、と思うんじゃないかな。

とりあえず、近所の公園にでも行こうかと思ったら、パフェが食べたいとか駄々をこねたので、喫茶店に連れて行った。

俺も中学時代にはそんなに喫茶店には行かなかったのだから、その辺にある店に入ってみたのだ。

店の雰囲気は悪くなく、落ち着いていて、俺たちのようなひと月前まで中学生だった高校生にはまだちよつと早いような店かも知れない。

「ご注文は？」

店の人が注文を聞きに来る。

「あー、俺はコーヒーで」

俺は高校受験で覚えたブラックコーヒーを、まあ、一応女の子の前でことごとちよつとした見栄も含めて注文した。

「かしこまりました、こちらの方は？」

「？」

希来はメニューを見ることがなく、不思議そうに店員を見上げていた。

「あー、パフェでいいんだよね？ このイチゴのいいよね？」

「うん！」

「じゃ、これお願いします」

何故だか自分ではメニューも見ないで、俺に注文をさせる。

もしかして世話ってこういう事なのか？

何なんだろうこの子。

メニューは待つこともなくすぐに運ばれてきた

ので、まずは話を、と思った俺の計画は崩れた。
ていうか、こんな細工の凝ったパフェ、あの時
間で作り上げたのか？

「おいしい！」

口にクリームを付けながら、満面の笑みでそう
言った希来。

「よかったな」

俺はそう返すのが精一杯だった。

「で、そろそろ話をしてくれないか。事情から話
して欲しいんだけどさ」

「？ 何の？」

希来は不思議そうに俺を見る。

「さ、帰るか……」

「ま、待ちなさいよっ！ 思い出した！ 今思い
出したっ！」

立ち上がって去ろうとする俺の腰にしがみつく
希来。

それだけで俺は動けなくなった。

いや、締め付けがきついとか、物凄い力がある
とかそういうのではない。

単に俺が女の子に抱き付かれ事、いや、それ以
前に女の子に触られる事に慣れてないっただけだ。

力の弱いこの子がするには、抱きつき攻撃は最
も効果が靦面だろう。

俺の動きは一瞬で止まった。

「わ、分かった、聞くから離れてくれ」

「うん……」

希来が離したので、俺は席に戻る。

「あのね？」

希来は事情を話し始めた。

話はダラダラ長いし、自慢話も多いから省略し
て簡単に言うと、江明家と言うのは本当に名家の
ようだ。

単刀直入に言えば、あの巨大メーカーであるツ
ルーンの創業一族らしい。

ツルーンを知らない人はいないと思うが、パソ
コンや最新家電から、日用家電までを製造販売し
て、ネットや最近では銀行まで手がけている、日
本を代表するメーカーの一つだ。

彼女の祖父がツルーンの創業者で、現在は会長
をしているらしく、彼女がお嬢様だというのも嘘
ではない。

ま、この地域は富豪の住宅が多いから、彼女の
家もその一つだろう。

彼女はこれまで家族に可愛がられて来、これまで在籍していたお嬢様中学でも周りに可愛がられて来たため、とてもわがままに、一人では何も出来ない子に育ってしまった

彼女の将来に不安を感じたお父さんが、高校は公立に入れて、もう少しまともに育つ事を期待したようだ。

「でもね、公立って何もないのよ！ 誰も私の世話をしてくれないし！」

いや、そんな事怒られても、それが普通だしな。お嬢様学校だって、誰かが世話をしてくれるわけじゃないだろう。

いや、行った事ないから知らないけどさ。

まあ、公立にはお嬢様学校とは違う雰囲気はあるだろう。

それが彼女には冷たく感じたのかもしれない。

だからこそ彼女のお父さんも公立に入れたんだろうが。

「だから！ あなたが私の世話をするの！ これから三年間。いいわね？」

「だから、何で俺がそんな事をしなきゃならないんだよ？」

俺はとりあえず拒否した。

いや、確かに可愛い子だと思う。

同じ歳とは思えないくらい身体も心も幼いけれど、この子と友達になって、困っていたら助けてやるという高校生活なら、悪くないと思う。

だが、この子のお世話を三年間して過ごす高校生活って何だろう。

俺にはもつといい未来があるんじゃないかと思いたい。

少なくとも、そうするならばバスケに青春を注いだ方が遥かにマシだと思う。

「分かってるわよ。あんたはこれが欲しいんじゃない？ ほら！」

希来は小さな手提げから万札を一束取り出すと、ぼん、と俺の前に置く。

「は？」

「私の世話をするなら、毎月百万、お給料としてあげるわ。これでいいんじゃない？」

そう当然のように言われても。

「いや、そういうのいいからさ」

俺は札束を彼女の前に置き返す。

「え？ どうしてよ！ お金は男のステータスな

んでしょ？」

希来が、もの凄く意外そうに俺を見る。

「男性観が極端過ぎるんじゃないか、それ」

「でも、お爺ちゃんは酔うといつもそう言ってるわよ？」

「うん、ツルーンの製品は二度と買わない」

いやまあ、創業者ってそういう事を言える大物じゃなきゃ出来ないんだろうけどさ。

「そもそも何で俺なんだよ？ あそこには他にも沢山人がいただろうに」

俺は根本的なことを聞いてみた。

あそこにはごった返すほどの人がいたはずだ。

その中から俺を選んだには、それなりの理由があると思う。

力が強そうだとか、賢そうだとか、そういうのがあって選ばれたのだとしたら、その誤解をまずは解いておきたい。

力は、まあスポーツしてたから全くないわけじゃないけれど、それほど出来るわけでもないし、この学校に来たからにはそれなりの成績も収めてきたけど、この学校に入ったら、全員が頭いいから、その中では多分普通の成績だろうし。

ただ、もしそれ以外の理由があるとするなら、他の事も考えておく必要がある。

何しろ相手はご令嬢だ。

どんな理由があるかも想像がつかない。

「たまたま目の前にいたから」

だが、彼女の答えは、誤解を解く以前のものだった。

「じゃ、そう言うことで。廊下で会っても話しかけないでくれ」

俺は再び離脱を試みる。

「嘘！ 本当はえーっと、背が高いから！」

そんな取ってつけた理由と共に、再び後ろから抱きしめられ、俺は動けなくなり、結局席に戻る。

「まず、希来に言いたいのは、誰もがお金で動くわけじゃないってことかな。それで動く人が悪いとは言わないが、動かない人もいるってことだけは覚えておいたほうがいいと思う」

「し、知ってるわよ！ お爺ちゃんも言ってたし」
希来は相変わらず反省のない態度でそんな事を言う。

「でも、私はそんな人間の動かし方も知ってるのよ」

不敵な笑顔で言うけれど、多分大したことじゃないと思う。

この子がこれまで人を動かして来れたとしたら、あの駄々だけだと思う。

もしくは周りの人がとても寛容だったとか。

「えーっと、あんた、名前なんていったっけ？」

「俺は荻久保篤だけど」

「荻久保ね？　じゃあ行くわよ！」

希来は大きく息を吸い込む。

「荻久保さん、私の世話をしてくださいっ！」

びしっ、と俺を指差し、勝ち誇った表情でそう

言い放つ彼女。

そんなドヤ顔で言われても俺の心が変わるわけ

もないんだけどさ。

「断る」

「え!?　どうして？」

心の底から驚く希来。

いや、そんな表情されることが驚きなんだけど。

「……………」

万策尽きた、という表情の希来。

いや、早過ぎないか？

「わーたーしーのーせーわー……っ！」

そして、また駄々が始まった。

やっぱりこれしかないのか、この子。

ここは落ち着いた雰囲気のお茶店。

さっきからの彼女の言動はそれだけで目立って

いて、変な目で見られていたのだが、これで更に

注目の的となった。

あーもう、面倒くさいな。

「落ち着こう、とりあえず落ち着こう！」

「何で言うこと聞かないのよ！　こんなに頭を下

げてるのに！」

「下げたっけ!？」

俺の見えない心の中で下げたんだろうか。

「いや、俺にもね、高校生活を楽しみたいという

希望って言うものが……」

「そんなことどうでもいいのよ！」

俺の高校生活はどうでもいい扱いされた。

「分かった！　体ね？　男は女の体で言うこと聞

くんでしょ!？」

「その結論は間違ってる上に、希来には特殊な需

要しかない！」

「うるさいっ！　ほらっ！」

希来はそう言うと、こともあろうに喫茶店の店

内で、スカートを捲り上げた。

「……！」

俺はすぐにでも突っ込むはずが、つい、食い入る様に見つめてしまった。

色はピンク。

素材は分らないが、少なくとも綿じゃない。

シルクっぽいような光沢があつて、このちんまくて子供っぽい希来が履いているとは思えないような上品な一品だった。

そこから生える、二本の細く白い脚も、その光沢を際立たせている。

「見た！ 見てるわね！ じつと見てるわね！」

希来が真っ赤な顔で、それでも勝ち誇ったように、俺を指差す。

「これであんたは私のお世話をする！ いいわね！」

そう言われたけれど、俺は何も言い返せなかった。

いや、パンツがあまりにも衝撃的だったので。

「さあ、私のお世話をしなさい！ さあさあ！」

周囲の人の視線をもとめせず、俺に迫ってくる希来。

正直、女の子のパンツを見せられただけで衝撃的だったのに、こう迫られるとかなり困る。

俺がこういうのに弱いって事を知ってやってるんじゃないかと思うくらいの確に俺の弱点を攻めてくる。

なんかもう、緊張するし、いい匂いするし……！

「あーもう！ わかった！ お互いどこかで妥協しよう！」

俺は彼女を押し戻した。

なんだか、このままでは言うことを聞いてしまひそうになったからだ。

そして事あるごとに迫られて、高校三年間彼女のお世話で終わった挙句、卒業後もつきまとわれそうな気がする。

最悪の最悪、最も譲歩したとしても卒業までだ。

その後までこんな関係が続くのはちよつと困る。

何だかんだ俺たちは入学したばかりの高校生で、まあ、周りの大人から見れば子供と思われている。

だからじゃれあっていたって子供のじゃれあいだと見てもらえるかもしれないが、大人になったら、じゃれあいも男女の付き合いだ。

この子が女の子である以上、異性を意識してな

かったとしても、男女の関係を疑われる。

いや、別にそれが悪いってわけじゃない。

希来も三年後には大人になっているだろうし、

結構な美人になると思う。

だけど、普通の、家柄も何も関係ない男女の関

係ってわけにはいかないと思う。

その時困るのは俺であり、希来だ。

ここはお互いのために妥協を考えるのが一番だろう。

「妥協って何をよ？」

それは今から考えるんだよ。

えーつと、なんだろう、この子の世話をしたく

ないし、そもそもそうする事はこの子の親が望んで

いるわけじゃないと思う。

この子に誰の助けもなく、何でも出来る子にな

って欲しいから公立に行かせてるんだろうし、そ

うなると俺が世話をする事は余計なことだ。

だけど、この子が一人では何も出来ないのはち

よつと一緒にいただけでも分かる。

それを友達として助けたり、助言をするくらい

なら構わないし、まあそれなりに楽しい高校生活

だと思ふ。

じつと俺の妥協案を待つ希来が、頭をこてん、と右に傾ける。

「じゃあさ、こうしよう。俺は世話をしない、だ

けど、希来が分からない事は俺が教える。世話は

しないから自分でやってもらうけど、希来にも不

安はない。それでいいだろ？」

「やだ」

希来は一瞬で否定した。

「何でだよ！」

「何でも！ おーせーわー！ー！ー！」

また駄々をこね始めた。

やれやれ、と思う反面、またパンツを見せるか

な、と少しだけ期待する自分が嫌だった。

「パンツまで見せたのにいいいっ！」

心を見透かされたようにそう言われてどきどき

した。

でも、これで動いたら駄目だ。

もしこれで動いたら、この子は俺がパンツを見

せたら動くと思ってしまうだろう。

それだけならまだしも、男はパンツを見せたら

動くと勘違いして、どこでも誰にでもパンツを見

せる子になってしまうかもしれない。

ツルーンの令嬢を痴女にしたとなれば、俺の人生はとても体力が要るものになる。

「希来のお世話をしたら、希来が成長出来ないだろ？ 希来は自分で何でも出来るようになるために公立に来たんじゃないのか？」

「……うん」

「じゃあさ、ちよつとは自分で頑張ってみよう、手伝いはするからさ」

「……うん、分かった」

少し不満そうだったけれど、希来は俺の提案を承諾した。

「お手伝いだから、給料は五十万でいい？ ……」

それとも、やつぱりパンツ？」

うつむいて顔を染めながらそんな事を言う希来。「両方ともとても魅力的だけど、遠慮しておく。」

友達として、手伝うからさ」

「友達……？」

希来は顔を上げる。

「うん、いいよな？」

「友達って便利！」

嬉しそうにそんな事を言い出すし。

いちいち勘違いするとこつちも説明が面倒だ。

「いや、友達は無償だけど、支え合いだから」俺は間違った考えに進みそうだった希来を止める。

「支え合い？」

「だから、希来が困ってたら俺が助ける。だけど、俺が困っていたら希来が助けるってことだ」

「荻久保は何に困ってるの？」

「変な子に絡まれて困ってる」

「ふうん。じゃ、私がその子に文句言って解決すればいいの？」

「うん、それは簡単だけど無理だな」

本人だし。

「まあいいや、今は困ってない。また、困ったら相談する」

「わかった！」

希来は元気にそう答える。

「じゃ、今日は帰ろうか」

俺は席を立つ。

「うん、あのね、ここは私が払うよ？」

「いや、自分のだけ払えばいいよ」

「支え合いだからっ！」

強い口調でそう言われる。

拒否するとまた駄々をこねられそうだ。

「分かったから、もうさっさと払ってくれ」

面倒になったので払ってもらうことにした。

「うん！」

希来は嬉しそうに財布から金を出して支払いをする。

なんだか、変なのに捕まったなあ、と思う心と、少し微笑ましいと思う心がどちらも消えなかった。

「じゃ、また明日」

喫茶店を出て、俺は手を振って彼女に背を向けた。

「待ちなさいよ！ お手伝いっ！」

また後ろから抱きつかれる。

この子、わざとやってるんじゃないか？

「何なんだよ？ もういいだろ？」

「電車って、どう乗るの……？」

「……は？」

突拍子もないことを聞かれるとまた、何の反応も出来ない。

「今日は朝、どうやって来たんだよ？」

「朝はね、送って来てもらったの。でも、帰りは

自分で帰ってきなさいって……」

うーん、この子の親も、さすがに電車の乗り方も知らないなんて思わなかったんだろうな。

そうでないなら、スパルタ過ぎるかどうかだ。

「えーっと、定期とかカードは持ってるのか？」

「こんなの貰ったよ？」

彼女がスカイブルーの財布から取り出したのは定期になつてICカード。

定期は六ヶ月先の年月を表示している。

「それを改札でタッチして、中に入って、出るときにもタッチすればいいんだけどさ」

「よく分からない！」

そんな堂々と宣言されても。

まあ、でも希来も虚勢を張ってはいるけど、不安なんだろうな。

うーん、不安だけど、俺は電車通学じゃないからなあ。

とりあえず、遠回りだけど駅まで一緒に行つて、改札通るまでは見ていようか。

「まあ、駅まで一緒に行くから、後は頑張ってくれ」

「うん。じゃあ行くわよ！」

なんか、そう当然のように言われるとちよつとイラツと来る。

彼女の歩く後姿に、長いツインテールがびよこ揺れる。

意味はないけど、ちようどいい位置にあるそれを、後ろから両左右に引つ張つてみた。

「にやぎいいいいっ！」

不思議な叫び声を上げる希来。

「何すんのよ！」

「何となく」

「何となくで思わずやってしまう事の限界超えすぎてるっ！」

希来に怒鳴られるけど、俺は溜飲が下がってすつきりしていた。

「どうしてそんなすつきりした顔してんのよ！」

「まあまあ、そんな些細なことはどうでもいいじゃないか」

「些細じゃないっ！」

その後希来に女の子の髪の毛の大切さについて説教されたけど、あまり聞いてなかった。

そうしている間に、駅の前に来た。

「そう言えば、電話番号教えなさいよ」

唐突に希来が携帯を取り出す。

「電話番号？」

「いつでもどこでもお世話……お手伝いが出来るように！」

「そんな理由なら嫌だけどさ」

「でーんーわーばーんーごーうーっ！」

駅前の人通りの中でまた駄々をこねられた。

「まあ、教える分にはいいけどさ。機嫌悪ければ出ないし」

「出ないと留守電で駄々をこねるわよ！」

厄介にも程があった。

「ま、友達として渡しておこうか。これだけど」

俺は希来にメモ書きした携帯番号を渡す。

「赤外線しか使ったことないから入れ方が分からない」

「……わかった。じゃ、赤外線使おうか」

家電メーカーのお嬢様ならもう少しそこ分かって欲しいけどな。

俺が希来に送信し、彼女からも送信される。

赤外線を使ったので、電話だけでなくメールもついてくる。

高校の友達用に作ったフォルダに、初めて入れ

るのがこんな子になるとは思わなかった。

そうして、駅に入り、改札の少し手前まで来る。

「じゃあ、さっき言ったから、分かるな？」

「わ、分かっているわよ。タッチすればいいんですよ？」

そう言いながらも、少し不安げな表情になる希来。

そんな表情をされると、ついに行つてしまいうになる。

だけど駄目だ。

俺がついて行く事は、希来のためにもならない。

「じゃ、頑張つて行つて来い！」

俺がそう言つて送り出すと、彼女は意を決して、歩き出した。

改札の前できよろきよろして、近くにいた駅員にカードをタッチしていた。

「ちがーう！」

俺は走つて希来を追いかけ、その行為を止めさせる。

「すみません、この子アホの子なんです！」

「ちよつと！ 誰がアホの子よ！」

「いいから！」

俺は、希来の手を引き、自動改札に連れて行く。

「ここにタッチ！ 一秒間！」

「う、うん……」

希来がそれに従つて、カードをタッチする。

すると前のゲートが開いて、彼女を中へと誘う。

「じゃ、さよなら、また明日」

「うん、じゃあ立派に帰るから！」

そう言つて彼女は改札の向こうへと消えていった。

普通の人は電車で帰るだけじゃ立派でもないんだけどな。

俺は彼女を見送ると、ちらり、と別の方角を振り返る。

ふむ、いなくなったか。

尾行されている事は気づいていた。

だが、それが何の目的か分からなかったから、ほつといたのだ。

名家の家の子供ともなると、あらゆる尾行の可能性がある。

それは本人の知らないところで本人を守る者もあれば、親にとつて一番の弱点でもあるその子供の誘拐や危害ということもある。

その気配は既に消えていた。
電車に乗ったとも思えない。

それほど大きな駅でもないから、改札の数は限られていた。

ここ以外となると、道の向こう側まで行かなければならず、そして、俺が希来を見送っている時にもその気配はあった。

目的はさっぱり分らない。

だが、これはただの学生である俺の手には余るかもしれない。

やりたくはないけど、あの人の力を借りるしかないかも知れない。

電話だけでもしておくか。

俺は、携帯を取り出した。

「はい、じゃ、お願いします」

携帯の受話器を切ると、俺は大きなため息をつく。

ふう、入学一日から大変な日だった。

やっと家路に着ける。

今日一日で色々消耗した気がする。

今日あったことの重要部分をまとめると、希来

にお世話しろと言われて、パンツを見て、手助けする事になった。

思ったほど大したことじゃないかもしれない。そう言えば、部活決められなかったな。

まあ、あの子の面倒を見なきゃならないかもしれないからもう、帰宅部でいいや。

ぴろりろりりん

そんな事を歩いていると、俺の着信が響く。

誰だろう、と思ってディスプレイを見るとさつき登録したばかりの「江明希来」の文字。

何だろう、もうそろそろ家に着いた頃なのか？

「もしもし？　どうかしたの？」

『おぎくぼーまよっだー』

受話器の向こうからは全力で泣いている希来の声。

「えーっと、今どこだよ？」

『わがんないー』

「まずは落ち着いて。とりあえず深呼吸して」

「すーはー。したよ？」

「うん、深呼吸は受話器離してやって欲しかったけどまあいい」

「そういう細かいことはもうどうでもよかった。

「近くに大きな看板ないか？　そこに地名書いてないか？」

『あのね、西安濃津って書いてある』

「終点だよな、そこ」

『終点って何よ。さつき降りなさい、って言われたから降りのよ』

「今度から言われる前に降りようか」

あーもう、やっぱりついて行けばよかった。

俺はそこから数十分、希来を家に届けるまで電話したままだった。

俺がお嬢様の世話をするなんて役不足？ 700円

妖の棲む丘 第七巻

400円

冬コミでの同時購入に限り 1000円

2013年12月31日 西よ05a 他人の代表

